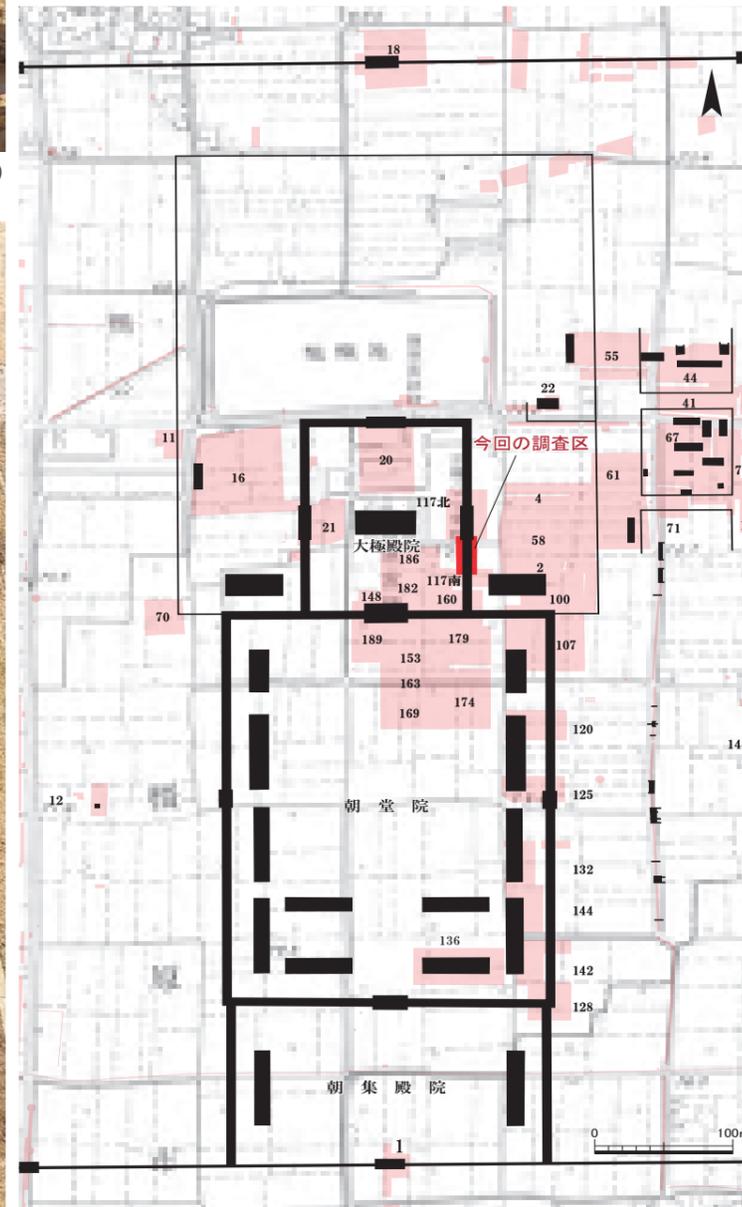




回廊東側の瓦出土状況（北東から）
※回廊基壇の外側に多くの瓦が捨てられたことがわかる



調査位置図
※調査地は大極殿院東門と東面回廊南半部との接続部にあたる

南北溝と整地土（北から）
※瓦を挟みながら丁寧に整地する

基壇外装据付溝・抜取溝と礫敷（北から）
※綺麗な黄色土が据付溝



調査区全景（北から）
※拳大の根石がよく見える場所が柱の位置にあたる

藤原宮 大極殿院の調査

飛鳥藤原第190次調査 現地説明会資料
(独) 国立文化財機構奈良文化財研究所 都城発掘調査部



藤原宮大極殿院から畝傍山を望む
(北東から)
2016年12月22日撮影

大極殿院東門と東面回廊南半部との接続部を発掘調査しました。東面回廊の礎石据付穴や根石が確認できたので、これまでよりも精確に柱の位置を検討できるようになりました。接続部の柱間（桁行）は、回廊の柱間（桁行）よりも狭くなるようです。また、回廊の内庭側で基壇外装の据付溝・抜取溝を良好な状態で検出できたことも、特筆されます。これらの成果は、大極殿院回廊の構造を考えるうえで、きわめて重要です。

1. 調査の経緯と目的

藤原宮は、694年から710年までの16年間、持統・文武・元明3代の天皇にわたって営まれた宮殿です。藤原宮の中心部に位置する大極殿院は、回廊で囲まれた東西約120m、南北約170mの区画です。大極殿院回廊では、日本古文化研究所による調査（1934・1935年）を端緒とし、その後、奈良文化財研究所が継続的に調査してきました。その結果、回廊は礎石建ち、複廊形式であり、4つの門をもつことが判明しました。しかし、東門の規模、東門と回廊との接続部の構造など不明な点もあり、その解明に向けて、今回、東門の南端部と東面回廊を調査することとなりました。

2. 調査の成果

東門 調査区の北端で、東門の南端にあたる礎石据付穴を確認しました。東門は桁行7間、梁行2間で、柱間は桁行4.2m（14尺）、梁行3.3m（11尺）と考えられます。

回廊 7間分（約27m）の礎石据付穴や根石、抜取穴を確認しました。回廊の柱間は桁行4.2m（14尺）、梁行3.0m（10尺）で、東門との接続部にあたる2間分だけは桁行の柱間が狭くなります。また、回廊の内側では基壇外装（凝灰岩）の据付溝・抜取溝を検出し、両側で回廊の雨落溝を確認しました。回廊基壇の規模を検討するうえで、貴重な成果です。

礫敷 大極殿院内庭は、拳大の礫を敷いた広場としています。

3. まとめ

今回の調査で、東門と東面回廊南半部をほぼすべて調査したこととなります。東門の規模が確定し、東門と東面回廊との接続部では柱間が狭くなることが判明しました。また、東門以南の東面回廊南半部は約59mで、15間あることが明らかとなりました。大極殿院回廊の構造を考えるうえで、重要な手がかりを得ることができました。



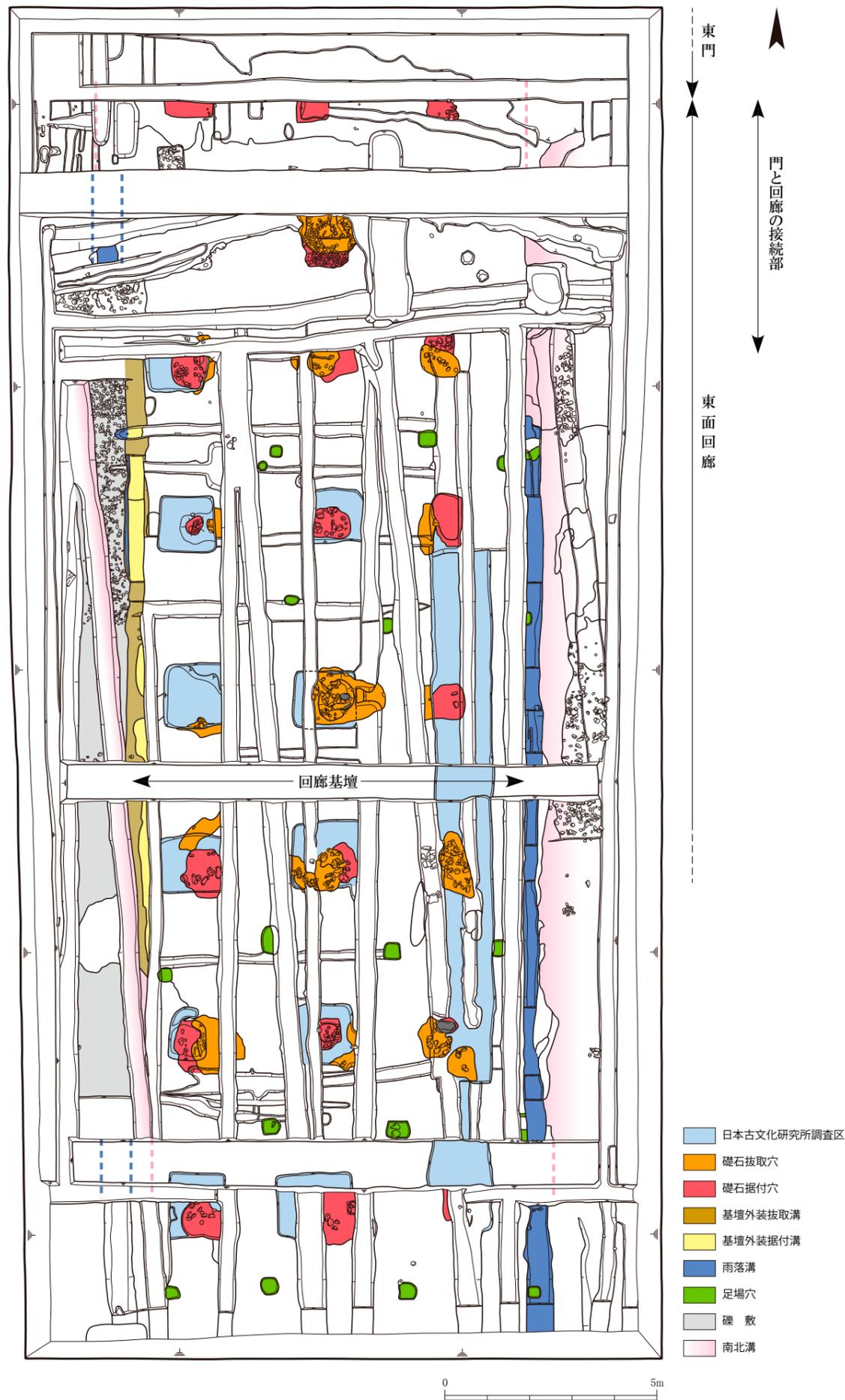
東門と回廊接続部の礎石据付穴（北から）
※据付穴に拳大の礫を詰めている



礎石の根石（北から）
※礎石の下に置かれた根石がよく残っている



礎石据付穴と抜取穴（北から）
※大きな穴を掘って礎石を抜き取ったことがわかる



飛鳥藤原第190次遺構平面図